

須玖岡本發見の古鏡に就いて

梅 原 末 治

一 序 説

筑前國筑紫郡須玖岡本の遺跡は、本文に於いて島田貞彦君の詳細に論述せられた如く、銅鉾銅劍を藏した甕棺なる特殊の墓制を示す顯著な一群として學界に知られたものであるが、其の明治三十二年に大石の下から發見された甕棺からは、また多數の支那古鏡鑑を伴つて、それ等が從來難解視せられてゐた遺跡の年代決定に一の基準となることが考へらるゝに至つて、同國三雲村の遺跡と共に該遺品の特に學者の研究の對象となつたのは私のこゝに改めて説くを要しない著名な事實である。

さて此の同地發見の鏡鑑類は遺跡の最初の調査者の一人である八木契三郎氏が夙に注意して其の實例を『考古精説』⁽¹⁾に採録したのであつたが、後大石の下に藏置の破片が遺跡を訪ふ諸氏の採集する處となつて漸次世に出で、古谷清氏の如きそれを紹介する人士もあつた。⁽²⁾然し出土の鏡鑑類の特に注目を惹いて、其の性質の究められる様になつたのは大正六、七年に銅鉾銅劍なり、支那古鏡鑑の研究が學界を賑はした頃からである。即ちそれまで許斐氏の許に保管せられてゐた破片若干が中山醫學博士の盡力に依つて、本考古學教室に送致せられたのが

機縁となつて、故富岡謙藏氏の遺跡發見鏡に關する最初の綜括的研究で、而も一時期を鏡鑑學の上に劃した九州北部に於ける銅劍銅鉞及び彌生式土器と伴出する古鏡の年代に就いてなる論文が表はれ、こゝに年代推定の標準が確立すると共に、故高橋文學博士の『銅鉞銅劍の研究』がついで世に出づると云ふ盛況を致した。⁽⁵⁾ 恰も此の前後に岡本部落の北方から三面の古鏡の發見があり、中山博士また鏡に關心を持たれることになつた。爾來博士は遺品の探求蒐集に精力を傾倒したので漸次資料の増加を見たが、本文に記載した大石の異動の後其の地域の搜索から特に多數の鏡片を獲られたので、それ等に考察を加へ、『須玖岡本出土の鏡片研究』なる一文を公にして、從來考へられてゐたに倍加する鏡の存在を確め、新しい形式の遺品を復原した。博士の此の調査研究が本問題の考查に對して、第二の劃期的なものとして、これによつて其の性質の一層明確になつたことは學界の爲に慶賀すべきである。⁽⁷⁾

私の本遺跡出土の古鏡に對する興味は早く大正五年の冬濱田教授に隨從して同遺跡を訪ふた際に發したのであつたが、後富岡氏の鏡鑑研究の補助として、遺跡の再訪各地に散在する遺物の調査に従事するに及んで感興の特に多きを覺え、大正七年には故人を助けて遺跡の學術的發掘を行ふて新資料を検出せんとするの計畫を樹てた程であつた。従つて其の後北九州を過ぎる度に中山博士の蒐集品を觀其の調査の結果を聴くのを樂しみとした。されば今次本報告の公刊に當つて、博士が厚意を以て其の蒐集に係る多數の破片を本學に貸與せられて、こゝに遺品全般に亘る實物の精査と、それよりする考察の機會を持つことになつたのは、故富岡氏の遺緒を嗣ぐ意味に於いて、私の特に本懷とするところである。

【註】(1)『考古精説』(第四四頁)に約三分の一を存した九曜文形鈕星雲鏡一個と同じ鈕二個との圖を録してゐるのがそれである。(後段第三六圖參照)

(2)次に記する古谷清氏の外に大原利武氏、和田千吉氏の如きが私の知つてゐる其の二三の人士である。大原氏が銅鉾其他を獲られた事は嘗て同氏から聞いた。和田氏の鏡片若干を拾得した事は故高橋博士の「銅鉾銅劍考」(考古學雜誌第六卷)に見えてゐる。

(3)古谷清氏「鹿部と須玖」(考古學雜誌第二卷第三號)に當時二條公銅駝坊陳列館にあつた夔鳳鏡と共に、氏か蒐集した破片三個を載せて、後者が孰れも斷面の違つてゐるところから、本來出土の鏡の少くなかつた事を説いてゐる。

(4)故富岡謙藏氏の本遺跡出土鏡に對する注意は既に早く其の「日本出土の支那古鏡」(史林第一卷第四號)に見ゆるが、「九州北部に於ける銅劍銅鉾及び彌生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」(考古學雜誌第八卷第九號)はそれを對象とした研究論文であつて、從來の資料を綜括した上、支那側の材料と比較して其の鏡を前漢代に屬するものと論證した點で重要な價值を有してゐる。

(5)故高橋博士の須玖出土鏡に關する記述は富岡氏の文に先立ち「考古學雜誌」(第六卷第十一號)の「銅鉾銅劍考」の(一)に見ゆるが、それには他の遺物を混出してゐた。『銅鉾銅劍の研究』は前者に補訂を加へたものであつて、富岡氏の説を繼承、新たに出土鏡の綜括を行ふて、通じて七種十一面

あつたことを擧げてゐる。

(6)中山博士の須玖發見鏡への關心は「銅鉾銅劍並に石劍發見地の遺物」(考古學雜誌第八卷第八・第九兩號)に見え、博士は其の中で方格四乳葉文鏡を復原して、製作の前漢代に屬するのを説いてゐられる。此の年代觀は當時博士の最も力を致された北部九州の金石併用期の研究に重要な關係があるので、爾來少なからぬ論文を書かれた。中で「古式支那鏡鑑沿革」(同誌第九卷連載)の如きは其の著しい一つである。然し博士の須玖遺跡出土の新たな鏡片の紹介考察は「大甕を發見せる古代遺蹟」(同誌第十一卷第一號以下)に於ける、許斐氏藏の星雲鏡の記載からであつて、次で「明治三十二年に於ける須玖岡本發掘物の出土狀態」(同第十二卷第十、第十一兩號)には遺跡から拾得の破片が録され、以下「須玖岡本の遺跡」(同第十七卷第八號)「三乳重圈葉文鏡に就て」(歴史と地理第二十卷第三號)「須玖岡本の鏡鑑増補」(考古學雜誌第十七卷第九號)等の資料の増加報告並に復原過程を示す論文を経て、遂に「須玖岡本出土の鏡片研究」(同誌第十八卷第十號第十一號、第十九卷第二號)なる論文となつて、出土鏡が三十三面乃至三十五面以上と云ふ豫想外の多數なのを説かれるに至つた。

(7)上記の外須玖の鏡に就いて、なほ後藤守一君の『日本考古學大系漢式鏡』中に當時まで表はれた上記諸氏の研究の紹介がある。

一一 記 載

〔圖版第一七—第三〇〕

須玖の岡本の遺跡のうち大石の下から見出された鏡鑑の類で今日存する最も著しいもの

は序記に舉げた中山博士の蒐集に係る破片であつて、これは其の數實に百數十片に上り、それから多數の遺品を復原し得るのである。然しなほ關係の資料としては、古い採集品でも、東京帝國大學文學部列品室に保藏せられてゐた破片の一群をはじめ、ほゞ形の見得る大きさを遺した舊二條公所藏の夔鳳鏡、福岡許斐氏保管の星雲鏡の復原形、同じ許斐氏の本考古學教室に送致した一群の破鏡片等のやゝ著しい類古谷清和田千吉氏等拾得した破片などがあり、最近のものでは本文録した調査に於いて島田君一行の齎し歸つた破鏡片若干を存して、資料が割合に豊富なのである。右の大石下の遺跡即ち地點以外からの出土鏡鑑では、いま朝鮮總督府博物館に所藏する、上記大正六年頃出土した銅劍伴出の二面のほゞ形の見得るものがあり、⁽¹⁾別に福岡高等學校にも同時出土の小鏡一を保存してゐる。⁽²⁾

是等のうち遺物の豊富な前者は、後に舉げた三例とは違つて、それのみで形式の明なものは夔鳳鏡、星雲鏡の二三に過ぎず、他は破片から復原せなければ性質を確め得ない、即ち材料としては厄介なものであるが、幸にも上記の中山博士の復原研究の努力に據つて、其の大體が分明になつたのは有難い。此の中山博士の須玖岡本出土鏡の復原研究は自家蒐集の破片を中心としたことは勿論であるが、同時に廣く上記の既知の資料をも參酌しての周到な觀察の結果に成つたのであるから、實物と對照して、其論定に吾々を首肯せしむるものが多い従つて、博士の見解に依つて大體本遺跡出土鏡の如何なりしかゞ確定されたわけである。さりながら、博士貸與の實物に就いて、其の上に表はれてゐる銘辭を精査し、またそれを色澤や、片の厚薄、圖様の工合などに併せ考へると、多數のうちに若干の變改を加へるの餘地のあるのがまた自ら認

められ、特に銘辭の上から博士の論述よりも性質の一層明瞭となるものゝあるのを見受ける。依つて以下に事實の記載として先づ實物の示す所に基き博士の記載を參酌して、新たな形の復原を試み注記を加へて、その然る所以を明にすることにしよう。

此の復原並に記述の基礎となつたのは固より右の中山博士蒐集の豊富な破片ではあるが、同時に前段に記した資料の主なもの、即ち本大學にある許斐氏舊藏の破鏡の類、昨秋の發掘調査の際一行の採集した若干の破片等に據り、またもと東京帝國大學文學部列品室に保管せられた破片も、幸に其の主要なものをそれが大震災で焼失した以前に調査して拓影を作製したのがあつたので利用し得たし、和田古谷兩氏の遺品も故高橋博士の『銅鉾銅劍の研究』所載の拓影が原物の約二分の一の大きなのを確めたので、もとの大きさに復原して、資料とすることが出來た。而して此の場合一般に拓影が其の作製に當つて面の凹凸に従ひ若干の擴大を來すことから、考察には拓影を利用したが、主として實物に基き、其の曲率を求め、つとめて實物の寫真から形式の復原を企てたのである。以下の記述に於いて中山博士の記載との間に往々見るところの大きな相違は同博士の復原の、これとは違つて拓本に據られた事に一の因由を持つわけである。⁽³⁾

中山博士の上記の復原研究の成果に基くと、本須玖岡本^リ地點の出土鏡は三十三面若しくは三十五面以上と云ふ數が示されてゐるが、いま多數の破片のうちから、そのみでは到底性質の究め難いものをしばらく除外して、上に記した新考察の下に性質の確め得たものに、本來形の見られた類を加へると計二十一面(若しくは二十三面)となるのであつて、形式は次の諸類

に亘つてゐる。

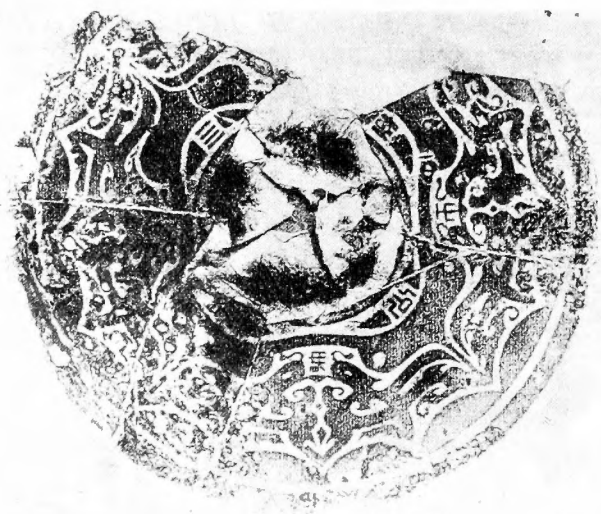
一	夔 鳳 鏡	一面
二	重圈四乳葉文鏡	二面
三	方格四乳葉文鏡	一面
四	重圈精白鏡	二面
五	重圈清白鏡	三面
六	内行花文清白鏡	四面(若しくは五面)
七	重圈日光鏡	三面
八	内行花文星雲鏡	五面(若しくは六面)
一	清白鏡系遺品	四面以上
二	内行花文縁鏡	數片
三	蟠螭内行花文鏡	破片
四	一種の草葉文鏡	破片

以上の外に破片から形式をば推し得る可能性のあるもの並に大さの推定の出來得るものが、また次の様に若干見受けられる。

即ち細片を除いて形の復原の可能な類の通計は三十面以内となつて、中山博士の得られた數よりは若干減少したことになる。以下夔鳳鏡からはじめて其の各に就いての記載を試み、併せて如上の歸結を得た所以を説くであらう。尤も記述の簡潔を期して、復原上の手續で説

明を要するものは「註」に於いてなし、なほ一々の形式も圖で明にし得る點は別に作製した圖版に譲ることにした。

(Fig. 33) 圖 三 三 第
影拓鏡夔鳳見發點D本岡玖須



一 夔 鳳 鏡

一面でこれは二條公銅駝坊陳列館の藏品として早くから其の拓影の學界に紹介せられたもので、而も本遺跡出土鏡中珍らしく、⁴⁾形の見得る遺品なのである。圖版第一七の1に示すのは其の寫眞であつて、東京帝室博物館の有に歸して後破損部の修補を試みたので、現在では一見形が全い。⁴⁾鏡背文は扁平大形の鈕を中央に置いて配した糸卷様圖形のうちに、位至三公、内區を飾る相向ふ夔鳳の間に一字宛「君宜古市」と二重の銘を容れ十六個の内行花紋帶を經て素縁となつたもの、夔鳳鏡としては標式的な類である。

二 重圈四乳葉文鏡

これはほゞ相似た遺品が二面ある。共に中山博士が多數の破片から苦心の末に大體の形の復原に成功したものであつて、其の際主として比較参照せられ、復原に役立つたのは關野博士舊藏の一鏡⁽⁶⁾（第三四圖の1）羅振玉氏の『古鏡圖錄』所錄の若干の拓影の樣に見受ける。然し博士の復原

ではなほ鈕の周圍の部分を確認するに至らず、疑を存し乍ら同部を別の鏡と認定したのであつたが、一面の方の破片の接合の成功から⁽⁶⁾（圖版第一八のp.d.及びe.o.n.m等）今や全形式を明になし得るに至つた。一面は圖版第一八の復原圖の示す如く、推定面徑約七寸八分あつて、構圖は長い屋根形に類した鈕を繞つて内に一圏を伴ふ十二弧から成る内行花紋帶があり、七面をした突帶がそれにつゞき、内區は圏を持つ四乳を中心とした所謂葉文から成つて二十弧の内行花紋帶が其の外廓をなし、遂に七面取りの縁に終つてゐる。他の一また同じ形式ながら、徑七寸六分内外と推定せられるやゝ小形のもの而して内側の内行花紋は十六弧外側のその二十八弧から成ることとは圖版第一九の復原圖から知られるのであつて、縁部をなす七面取りの素帶幅の全徑に比べて廣いこともまた前者との間に見られる相違の一である。⁽⁷⁾

三 方格四乳葉文鏡

許斐氏から本大學へ寄贈の破片中に存する大きな破片一個に依つて夙に其の存在が注意に上り、池上年君の手に成つた方格區を除いた復原圖が中山博士の論文の中に收められたことであつた。⁽⁸⁾博士は其の後これと厚さ其他の條件の合致した破片十個ばかりを採集して右の復原圖に若干の補正を加へるの要を認められた。⁽⁹⁾圖版第二〇はそれ等の現存の破片に基く復原形であつて、補ふに和田古谷兩氏の手許や、もと東京帝國大學文學部にあつた同じ鏡の片と推定し得る類の拓影⁽¹⁰⁾（圖版第二〇）を以てしたもの。徑は七寸八分内外、其の外縁は十六弧の内行花紋帶から成り、方格を形成する七面帶は内外ともに外側に一線が添ひ、其の中間に銘辭を配してゐるが、これが通例の隅の部分に文様を置いた式でないことは、一個の同部の片に「母」なる

一字の遺存するので明であるし、それに古谷清君採集の一片(同上kの破片)の示すところ、並に爾餘の小破片に僅に遺存する銘の字劃の一部などからすると、文は普通に見る八字の聯句ではなくて、十六字若しくは十二字から成る式であつたことが知られる。⁽¹⁰⁾而して古谷氏の片に方格内對角線上に一直線の尖端の存するところから、失はれた其の鈕座が故富岡氏所藏の一鏡をはじめ時に類を見る一種の四葉形であつたことが確められて面白い。⁽¹¹⁾

四 重圈精白鏡

此の鏡はじめ以下數項に録するところの遺品は所謂ゴチック式の異體文字の銘を有する點に特色を持つ一群であつて、本遺跡發見古鏡中過半數を占むるものなのである。本式は故富岡氏が突帶を中央にして二重の銘辭のある東京帝國大學文學部舊藏の破片(圖版第二一Iのa)から夙に其の存在を注意せられたものであるが、中山博士は其の後同じ鏡の小片で縁と思はれる類若干(同上c)の外に、漆黒の美しき色澤をした同式の別個の片少數を見出して(圖版第二四のI參照)それから本來二面あつたことを確められた。此の後者はその縁を定め得ないので、大さ等を知り難いが、前者は徑五寸七分内外あつたと推測せられる(圖版第二二のI參照)。形式の詳細は桑名鐵城氏舊藏の一鏡(12)から確定し得て失はれた鈕區が所謂九曜座の圓形であつたことも銘(13)の全文も復原出来る。次記は孫星衍の釋讀に基いた其の銘文であつて文中に●を加へたのが第一の鏡の破片に遺存するもの、また○が第二の鏡片に見ゆるものなのである。

瑩・精・白・而・事・君。怨・陰・驩・之・弇・明。煥・玄・錫・之・流・澤。志・疏・遠・而・日・忘。慎・庠・美・之・窮・嗤。
外・丞・驩・之・可・欲。說・慕・安・於・之・重・泉。願・永・思・而・母・紀。(外銘)

内請頌以昭明。光輝桌夫日月。心忽揚而願忠。然壅塞而不池。(内銘)

此の銘文を孫氏が文體楚離に似たと讀したことは富岡氏の紹介せられた處であるが、字跡の整美と相俟つて鏡鑑中稀に見る名文と云ふべきである。

五 重圈清白鏡

形式の大體は前者と異なる處ないが、銘文の初に來る絜精白なる文字がこれでは絜清白に作られ、また其の書の體の少しく異なるどころから區別を立てたのである。本類亦もと東京帝國大學文學部に藏してゐた遺品のうちに破片三個(圖版第二二のabc)があつて、夙に注意に上つたものであるが、中山博士も若干の破片を蒐集して、二者のうちに絜清白なる銘のはじめの部分が二つあることから二面なのを想定せられた。⁽¹⁵⁾ 焼失前の實見の記憶に基くに東京大學にあつたものは黒漆の銅色をした彫鏤の極めて鋭い佳鏡であつて、縁部の突帶も細手に出來上つてゐた。中山博士の推定した一面の方は銅質の示すところ前者と違つてゐないが、未だ縁部を明にするに至らなかつたのを、昨年秋の發掘の際島田君一行の獲た縁片が既得の「清白而」の銘ある片と接合して、其の前者に等しい細手に屬し、二者が殆んど同大同式で、單に銘帶を繞る櫛齒文に少許の違ひを見るに過ぎないことが確められた。圖版第二一の2は前者の拓本に基く復原形であり、また二四の3は後者に屬する。圖で明な如く銘の書體は異なるが、上に記した初の句の精を清に作る外全文の同一であることは現存破片の實際から知られる。⁽¹⁶⁾ 四の例に倣ふて、其の全銘文に第一に屬する破片の文字には●を附し、他のは○で以て遺存部を表はすことにした。復原徑約五寸五分。

繫・清・白・而・事・君。怨・陰・驩・之・弇・明。煥・玄・錫・之・流・澤。志・疏・遠・而・日・忘。慎・庠・美・之・窮・嗤。

外・丞・驩・之・可・欲。說・慕・安・於・重・泉。願・永・思・而・母・紀。(外銘)

內・請・願・以・昭・明。光・輝・桌・夫・日・月。心・忽・揚・而・願・忠。然・壅・塞・而・不・池。(內銘)

以上の二面に對して中山博士の採集に係る破片中に同じ重圈鏡の內帶の一部で上引銘文中の內銘第一句の初の一字即ち「內」最後の二字「不池」どの銘を存したものがある。單に銘文の上からすると二面の孰れかに屬する片とも見られるが、實物の示すところ、突帶の幅をはじめ、兩側の斜行櫛齒文の工合、鏡の厚さその他に於いて一致を缺くので、到底其の破片と認め難い。で別な同式鏡一面を此の片から想定するのを穩當としよう。圖版第二四二に載せたのがその片である。附載の拓影は和田氏の採集に係る破片で、果してこれと同一鏡片なりや否やなほ明でないが試みに緣部に當てたのである。これで重圈清白鏡は三面あつた事になる。

六、內行花文清白鏡

此の形式の遺品の存在は既に故高橋博士の注意に上つたのであるが、中山博士は其の採集に係る破片の考査からもと三面若しくは其れ以上あつた事を說いて明確の度を加へた。(17)一體其の三面は博士も注記してゐられる如く、讃岐國御殿山古墳大和西の京附近、(第三四圖の4)同じ筑前國三雲村の甕棺内等からの出土品、(第三七圖の1)に見ると同じい形式で、構圖は素文突縁の內側が銘帶になつて、前者に似たところの

繫清白而事君。志治之合明口。玄之流澤疏遠。而日忘美口外丞。可說口思而無紀。(19)
の銘があり、次に八弧から成る內行花文帶の內區を持つ點に特徴の見られるもの、鈕座は何れも失はれてゐるが、現存の諸部分の破片と上記の完形品との一致から珠文葉座鈕であつたと

して誤りがなからう。一面分の外破片は少ないが上引の銘文中第三句に當る同じ銘字を持つ部分の並存から同大の鏡の三面あつたことが確證出來中山博士の以て形式不詳清白鏡としたうちに此の類の含まれてゐる事が知られた。⁽²⁰⁾かくて得た復原圖が圖版第二二、第二三に示すものなのである。尤も銘には多少の出入があつて、一に玄之流澤とある處が二に玄口錫流澤となつてあつて、此の種の銘が本來四、五の類の長い文章を隨意に省略したものであることを察知せしめる。復原徑五寸五分乃至五寸八分あつて三者ともに班鏽はあるが美しい漆黒色を呈してゐる。

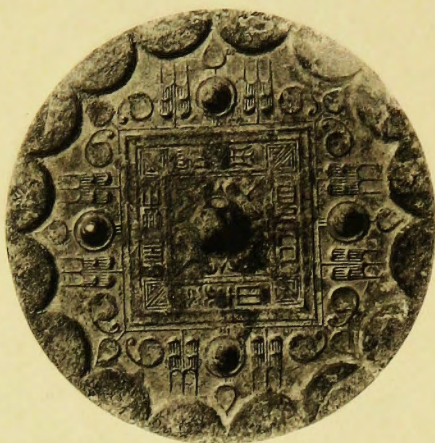
右の大形な内行花文清白鏡三面に對して、他の一面(若しくは二面は圖版第二五の2に載せた破片の示すところであつて、中山博士の論文の第九圖に復原形を載せてある。)これは甚だ薄手の、而も兩面共に掬す可き色澤を持つた遺品で、復原の徑は三寸二三分の間にある。主文様たる内行八弧文の弧間には一つ置きに渦文を容れて居り、また外帶に「而以及之」の一字を遺存する片があつて、本來こゝに「内清而以昭明光而象夫日月」云々の通有の銘文のあつたことが察せられる。古谷清氏の採集した破片のうちにある「内清」なる銘の遺存した類似の破片⁽²¹⁾(圖版第二二、五のa)を以て中山博士は此の鏡に屬するものではなからうかと推測してゐる。⁽²²⁾拓影の示す突縁の幅其他からすると、此の推測は當つてゐるやに思はれるが、さて翻つて考へるに、兩者を同一鏡の破片とすると銘文は「内清」から直ちに「而以」に續くわけになるから、この兩破片を接合した時見られるが如き内行花文帶の喰ひ違ひを生すべき筈がないし、既に當の中山博士も懸念した其の縁部の厚さに於いて、古谷氏の片が上記の例の如く薄くない様子が、其の「鹿部と須玖」なる論文の附圖から窺はれるから、

第三四圖

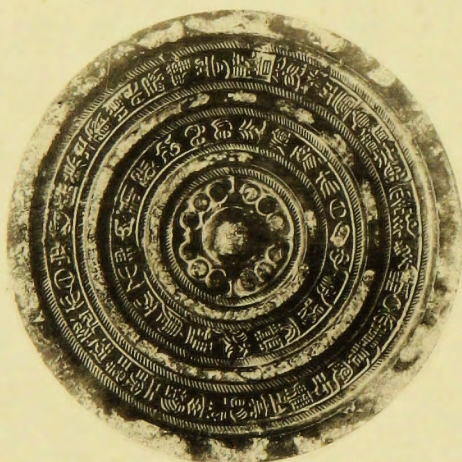
須玖岡本發見鏡片復原對照支那古鏡鑑（其一）



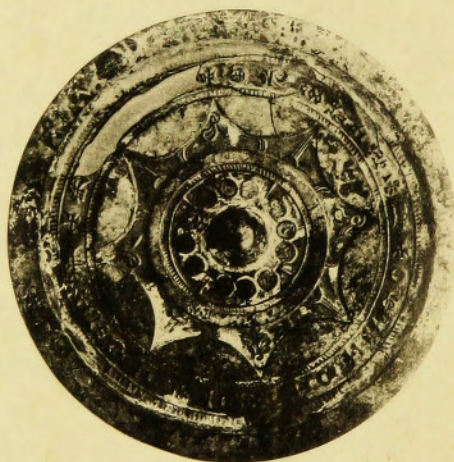
(1) 重圈四乳葉文鏡



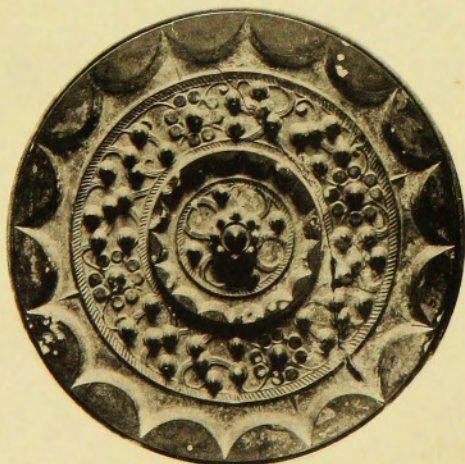
(2) 方格四乳葉文鏡



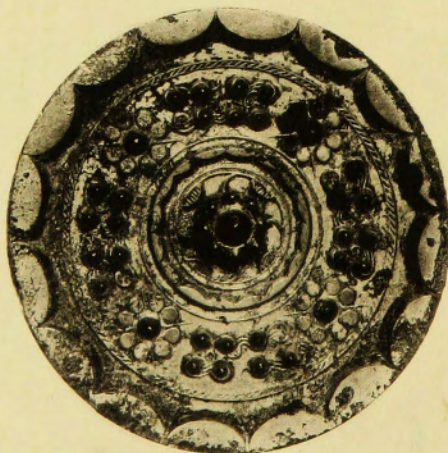
(3) 重圈精白鏡



(4) 內行花文清白鏡



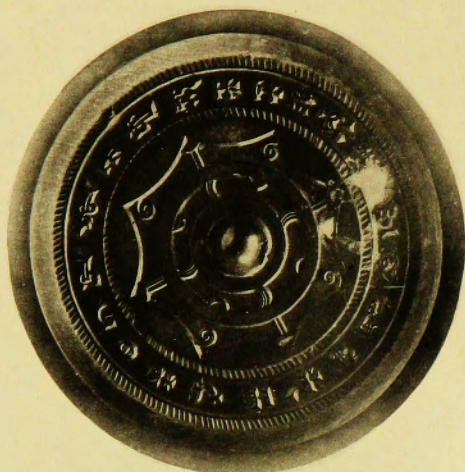
(5) 內行花文星雲鏡



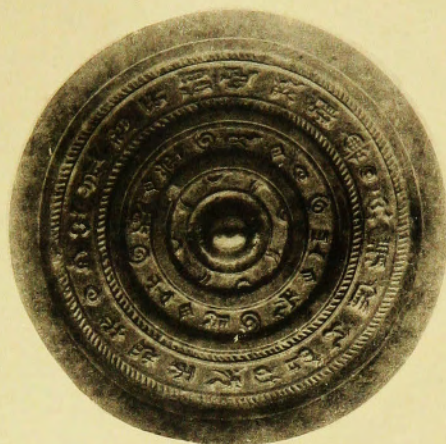
(6) 內行花文星雲鏡

第三五圖

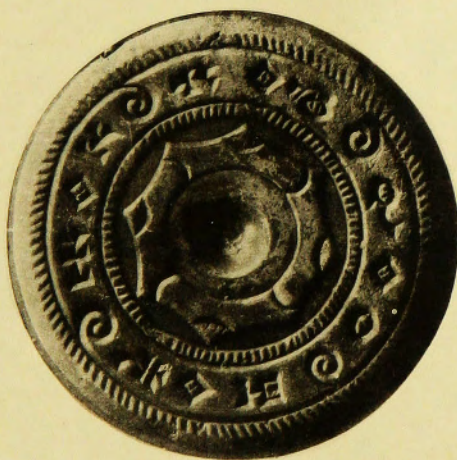
須玖岡本發見鏡片復原對照支那古鏡鑑 (其二)



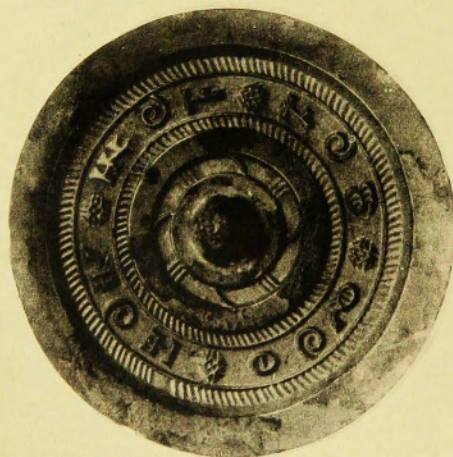
(1) 內行花文清白鏡



(2) 重圈日光鏡



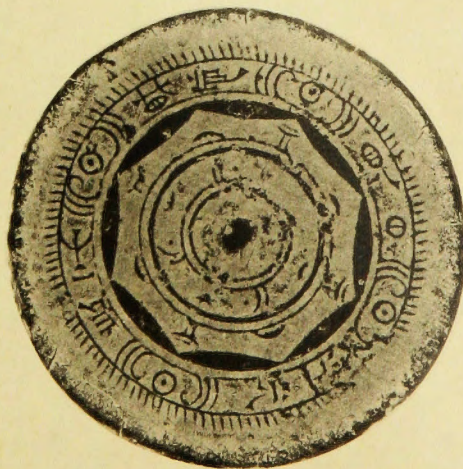
(3) 內行花文日光鏡



(4) 重圈日光鏡



(5) 內行花文日光鏡



(6) 內行花文日光鏡

これは寧ろ別々の同式片と解するのが穩當の様に見ゆる。而して此の推測を助くるものは、中山博士蒐集の破片のうちにある内行花文帶から鈕の周圍の突帶の一部に及ぶ小破片(同上)が前者と酷似し乍ら弧間の渦文の方向の逆なのをはじめ厚さ其他で一致せずそれから別な同式鏡の存在を想定し得ることである。果して然らば同じ式が二面となる。但しいま古谷氏の片を精査し得ないし、上記の破片が餘りに小であるから疑を存して置く。數の計算に四面若しくは五面としたのはこの爲であるなほ此の鏡の失はれた鈕座の部分は右の一破片からすると朝鮮樂浪出土に係る同じ形式に屬する一鏡の如く(第三五圖の1参照)鈕座と内行花紋帶との間になほ一突帶が存したと解せられるが、他方『泉屋清賞』鏡鑒部第六第七兩圖に見る如き内行花文から直ちに鈕座となる遺品もあるから二面分と見ると一方には疑問がのこるのである。

七 重圈日光鏡

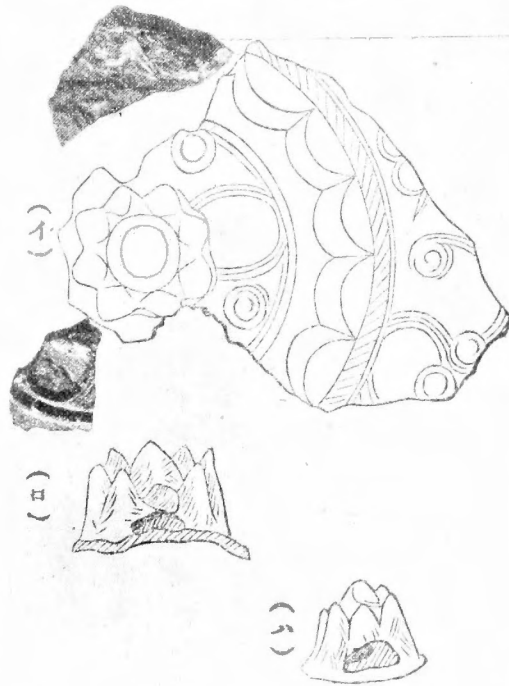
此の形式に屬する三面は從來から其の破片が各々別個のものとして中山博士の注意に上つてゐたが、たゞ銘文に對する考察が充分でなかつた處から性質の明瞭を缺いた類なのである。三面のうちの第一はもと東京帝國大學文學部にあつた破片の示す式で其の拓影を桑名鐵城氏所藏の一鏡(第三五圖の2)と對比すると銘辭は内外兩帶にあつて、外帶には上記内行花文清白鏡の第二類と同じい「内清願以昭明光而象夫日月心忽揚」云々の文字を容れ、また内帶は一種の圖形で分たれた間に「見日之光長不相忘」の銘を持つ支那人の所謂日光鑑の類で現存部がその内帶の八字句の銘の中間圖様を挟んで「光」長三字の各一部宛の見らるゝものなのが瞭である。(24)中山博士採集片中にも是れの一部と覺しき三小片を見受ける(圖版第二五の1のb c d)此の鏡の緣部を

いま定め得ないから大きさを確め難いが、右の破片の中間の突帯の曲率から推すと徑五寸に近いものであつたであらう。其の二は中山博士が其の論文の第十一圖に載せた片で、(圖版第二五の4)島田君一行の昨秋獲た遺品中それに接合する小片があり別に中山博士採集の縁片中にも同じ鏡の破片と推定する片を存してゐる。(25)是等からして本遺品が徑二寸五分内外の小形であること、素突縁の内側格子狀を斜に置いた圖と渦文との交互にしたもので八等分した帶に、「見日之光、天下大明」なる文字を配した簡單な日光鏡であることが、同じ類の支那出土品との對比に依つて確め得る。(26)現存部は右の銘帶のうち二個の圖様の間に「見」の一字の遺つたものである。(27)鈕座の周邊の圖様は此の破片からだけでは究め得ないが、附載の桑名鐵城氏の一鏡(第三五圖の4)との比較から、突帯を繞らした重圈と見るの推定が成り立ち得よう。其の三の鏡は同じく博士が其の論文の第十二圖に載せた片で、(圖版第二五のa b)これは其の推定の如く外帶の銘を羅氏の『古鏡圖錄』載せた一鏡との對比から、現存部にある忘なる一字と字間を分つ圖様が「見日之光、長不相忘」の一部であることの認められるもの、従つてそれから此の鏡の性質が確定するわけである。尤も此の鏡の字間を區劃する圖形は上の鏡とは同一ではない。

八 内行花文星雲鏡

所謂精白鏡の類に次いで本遺跡出土鏡中の著しい一群をなすものが此の支那人の所謂星雲鏡なのである。此の式は初にも一言した如く、八木氏が夙に其の例を『考古精説』のうちに擧げてゐるし、中山博士また其の復原に疑問の點はあるが同じく其の形式の認めらるゝ復原鏡一面の福岡許斐氏の許にあることを其の研究の最初に紹介せられた。(28)而して其の後遺跡地

第 三 六 圖
『考古精説』所載精白鏡圖



での克明な破片の探索から更に多數の同式に屬する遺片を得たので、それから先づ一鏡の復原を試みられたが、後更に新出の資料を加へ考查を重ねて、須玖出土の同式鏡の少くとも四面場合に依れば五面あることを主張せらるゝに至つた。⁽³⁰⁾ さて博士の此の推定は極めて入念なもので極小の破片をも忽せにせない處推重すべき高見であるが然し中になほ考慮を要する類が全くないではない。⁽³²⁾ 一體此の類は

上記の諸例の如く銘文を持たないから、其の見地に立つ査定が不可能であり、従つて文様に據る外ないが、さうなると小破片では判斷に苦しむ類が出て來る。

で私は中山博士の貸與せられた破片其他から新たに星雲鏡の復原を試みるに當つて、先づ星雲文を繞る櫛齒文帶の幅乃至櫛目の粗密に識別の一根據を置き、兼て星雲形の示す細部や鏡體の厚さ、色

澤鏽の状態などを考慮に入れ、大別を終へて後博士の復原上の周到な注意點を參酌したのであつた。⁽³¹⁾ 此の結果其の中から形を察し得る四面を得たのである。處が此の中には中山博士が其の論文で第四例として記してゐるのを疑問片として圈外に置いてから、若しこれを認めるとするとなほ一面を増すわけになる。それに八木氏の著書に載するもの並に許斐氏の遺

品が加はつたのが須玖出土星雲鏡の今日見得る總計なのである。此の八木氏の分は九曜文形の鈕を中央にした全形の約三分の一の大きさを有するもの、中山博士は其の一部をなすと覺しき破片を蒐集してゐる。(第三六圖)また許斐氏の鏡は縁に添へた分が上述内行花文精白鏡の主文様と覺しく、その内に星雲鏡片を箴め込んだものと解せらるから、上記復原の諸鏡との間に當然連關が考へられて、二者からなほ二面の星雲鏡を想定する事は固より困難であるが一面の別な鏡を見積ることは可能であらう。して見れば總計五面乃至六面と云ふ事になる。⁽³⁵⁾

さて是等の星雲鏡中、復原に疑問のある許斐氏の一鏡を除くと他は何れも此の形式に通有な内外各十六弧から成る内行花紋の帶の間に内區があつて、これが珠紋座乳で四分され、各に所謂星雲文——實は虺龍文の極端に珠文化したと思はれるものを配した類であつて、鈕座から内側の花文帶までの工合は八木氏所掲の圖の一例が明であり、他も相似てゐたらしい事は同じ様な小片の存在から察せられる。而して私の復原して圖版の第二六第二七に載せた四面のうち、三面は徑五寸二三分の間にあつて、珠紋葉座乳が外圈に向つて對角線上に座の尖端を向け、別に圈外に放射狀に出た突起線のある式なのに對し、他の一面即ち小破片とも東京大學に保存してあつた一片^(圖版第三七のF)等から形を復原した一は徑五寸六七分に近いものなのを想定し得た外に、右の圈外の突線がなく、また珠文葉座の外側の二線が八字形に彎曲して櫛齒文帶の堺線に續いたこと、第三四圖の五に載せた瑞典ハルビイル伯夫人藏品の如くで前類とは細部の相違を示すものである。⁽³⁷⁾

以上録した諸鏡に對して、次に擧げやうとする四例は破片の少ない爲に其の性質の尙確然とせず、たゞ其の上に表はれた特殊の圖樣から個々の遺品なのを推し得るに過ぎない。從つて其の性質の決定は將來是等に接合する破片の發見に待つより外はない。昨秋島田君一行の調査の結果に徴するに、遺跡地に於ける破片の殘存がなほ認めらるゝから、吾々は中山博士の周到な細片の觀察から、此の類の存在の可能が考定せられ、こゝにそれを紹介し得るを欣びとすると共に、博士の熱心に依つて近い將來に是等の性質を確める資料の檢出せられることに期待を係ける次第である。先づ此の類として擧ぐ可きは所謂清白鏡の一群がある。

九 清白鏡系統の遺品

此の所謂清白鏡系統の類は本遺跡の出土品中最も數の多いものであつて、其の形式の詳細を確め得た十二面内外に對しては既に解説を加へたが、中山博士採集の破片中には、同じ類の小破片で上記の復原に用ひ得なかつたものなほ四十餘片を存し（圖版第二八
第二九參照）また島田君採集片のうちにも若干を見受ける。是等には縁あり、銘帶の一部あり、重圈の内側の突帶あり、また鈕區の珠文葉座乳や内行花文帶の一部をも含んで種々の樣態を示してゐる。中で既述の遺品の孰れかの一部を形造つたと思惟せられるものに鈕並に其の座の一群がある（圖版第二
九の下段）これは鈕と座の一部を遺存する一個をはじめ、座の方三四個分、鈕二個分位あつて、前者はどれも珠文葉座なのを認め得るもの、從つて大きさを併せ考へると、重圈清白鏡若しくは内行花文清白鏡の何れかに屬するものと見ゆるが、いま明に定め得ない。此の一群の如く明瞭ではないが縁や重圈の一部の破片で同じく既記の遺品の一部をなすものがまた必定存しやうが、いまそれを他

と識別することは容易でない。でどうしても前者に合致し難い特徴を持つ破片を中心としても此の類になほ凡そ幾面分の清白鏡を含むかに就いて明快な解決を與へる事は不可能である。然し假りに縁のみを採つて見ると其の厚さ幅乃至銅色などから少くも五六面分の互に違つた片が認められる様であるし、中に内區の一部を存して其の形式も、なに程か推究し得るものもないではない。此の類で舉ぐ可きは圖版第二八の2に示した鈕を繞る内行八弧文區の半ばを存するもので、これは僅に存した銘帶の一部に渦文と覺しい圖形の痕迹をとゞむるから、同圖と交互に八字の銘辭を容れた内行花文日光鏡の類^(例へば第三五圖の3、4の如き鏡)であつたと考へられる。中山博士は同圖版の4の縁片を以て同じ鏡の破片と見做し復原を試みてゐる。⁽³⁸⁾ 兩者は色澤の點は似てゐるが、このものは彼の縁として徑が稍小さく二者を組合せると適當な幅の銘帶を得難い憾があり、櫛齒文の工合また違つてゐるから別個の片とすべきであらう。同じ圖版の3は僅に一個の破片乍ら其の大きい一の縁の曲率から徑の三寸二三分の間にあることが認められ、また銘帶に「而願」なる銘の一部を遺存するから、よし其の内側が内行花文であつたか、果た重圈文をなしてゐたか定め得ないとしても、銘の全文の「内清而以昭明、光而象夫日月、心忽揚而願、忠然壅塞而不池」であつたことが察せられて、形式の推測がつく。⁽³⁹⁾ 同圖の5また「而不」の銘を遺存して同じ類と思はれる。推定の徑は二寸五六分の間であらう。⁽⁴⁰⁾ 中山博士の論文には復原に種々の考慮を加へた後清白鏡系の遺品計二十面以上と云ふ數字を示してゐる。中で銘文の決定から重複の明となつたもの若干を除くと、如上の總計と相近いものとなるわけである。

一〇 内行花文縁片並蟠螭鏡片？

前者は圖版第二八の1に示す如く僅かに縁の三片を遺すに過ぎないが、中山博士の説いてゐられる如く薄⁽⁴¹⁾い其の縁の内行花紋形から徑三寸五分内外の十六弧文の縁を持つ一鏡が復原せられて、それは上來記した遺品に其の例がない。此の鏡其の内區と認むべき確かな破片がないので、いま弧文縁の内側に一圈を持つのを知り得るのみに過ぎない。但し中山博士の以て異式の星雲鏡の小片とした一の圓圈を伴ふもの^(同上)は其の曲率此の鏡のそれと合致して、これが内區でないかを思はしめる。で復原形には試みにその片を加へた。

蟠螭鏡片と云ふのは中山博士が其の蒐集のうちから見出した極めて小さな一片^(圖版第二八のg h)から其の存在を想定したものであつて、該名稱は破片の上に表はれた獸形の蟠螭鏡なる名稱を以て呼ばれてゐる式に似てゐると云ふのに基くどある。破片僅かに四五分の一片で、其後見出した他の片は更に小さいから、獸形なほ明になし難い部分を含むが、博士の示された實大寫真に依ると通有の蟠螭鏡のそれとは一致せないで、寧ろ奇古な虺龍文とも見るべきものなのを感じしめる。そは兎も角として他と區別せらるべき片であり、此の破片から一面の別個の形式を肯定することは許されやう。同じ處に收めた内行花文を遺した相似た片^(同上)を中山博士は最初上記の片と併せ論じて内行花文蟠螭鏡と呼ぶべきでないかを説いたが、後別個として是等から二面の遺品を想定せられた。兩者を別個とするのは厚さや銅質などから見て當つてゐるであらうが、初の破片の厚さなどからすると、それが前段の内行花文縁鏡の内區ではないかの臆測を加へしめるものがある。試みに記して後考を俟つ。

一一 一種の草葉文鏡

圖版第二八のfのうちに示した特色のある一片から存在を推定したもので、右の破片から知り得るところは、徑が四寸以下の小さなもので突帶らしい縁の内側に斜行櫛齒文帶があり、内區がそれについて、うちに一種の草葉の唐草文を線で表はしたことである。珍らしい構圖と思ふが、これのみでは形式の全般を知り難い。

之を要するに須玖岡本のD地點に副葬された鏡鑑は、破碎と散佚との爲になほ性質の明でない類を含むのではあるが、中山博士の努力に負ふて、單に其の數の多いことが漸次確實になつたのみならず、如上の記述から其の形式が明瞭の度を加へ、うちに徑八寸に近い重圈四乳葉文鏡、方格四乳葉文鏡の類を確實に復原し得たのである。その點からすると此の遺跡は同國三雲のそれと共に遺物の豊富と佳品を含む點とで並び稱せられやう。是等の年代並に性質は支那古鏡鑑の研究に考古學上の「フンド」として資料たると共に、他方それが當代の高い支那の文化所産たる關係上遺跡の性質の考定に重要な寄與をなすものである。次に私は同じ須玖岡本から出てゐるなほ三面の鏡の記載をなし、而して後に右の點を論ずるであらう。⁽⁴³⁾

さて此の須玖岡本出土の別個の三面の鏡鑑は何れも同地の民家に接し、其の北に位する稍高き耕地即ちB地點に埋没の合口甕棺の内に副葬せられてゐたものであつて、其のうちの波文方格規矩鏡とも名づく可き一面と小さな内行花文日光鏡とは中山博士の詳しい記述が「銅鉾銅劍發見地の遺物追加」のうちに見え、故富岡謙藏氏のそれ等に對する見解また遺著のうち

に收められたが、他の一面は其の發見の傳へのみで、實物の學界に紹介せられたのは遙かにおくれた昭和三年九月の事に屬する。⁽⁴⁾ いま簡潔に三者の特色を擧げるに、波文方格規矩鏡は三者中最も著しい遺品と云ふ可く、徑四寸六分餘あり、内區の半ばを失つてゐるが、鈕の一種の四葉座であること、其の主圖様が右の鈕座を繞る一種の大きな方格と「」字形「」字形に似た所謂規矩形に簡單な草樣形の線文を配したのから成る所謂規矩四神鏡の一異形であること、圖版第三〇の1の寫眞に見る如く、而して其の方格のうちに左字にて表はした銘は初と終りとの二區を存して、一は「日有熹月内富」他は「憂患樂已未央」と讀み得る。第二の日光鏡は徑二寸六分の縁の一部を缺いた薄手の粗造品であつて、鈕を繞る内行八弧文帶と素縁との間の銘帶に渦文と交互に配した銘はいま「見之光長」忘の五字を臚氣ながら存して、本來の全文が「見日之光長不相忘」とあつた事の知られるもの、同形式の鏡は上述の「」地點發見の遺物中にも見たことではあるが、これは鑄上りの拙な點に前者と著しい相異を示してゐる。第三の鏡は第二の遺品と同じく内行花文の系統に屬するが、これは徑二寸六分弱の一層粗末なもので、銅質また含錫量に乏しく、殆んど全部銹化し去つて外觀拙に、鏡背文の表現朦朧として、いま認め得るものは素縁と鈕との間の弧文と、そのうちに珠文かとも思はるゝ若干の隆起に過ぎない。此の弧文の數は一部が破損して明瞭でない。中山博士は八弧とせられてゐるが、實物に就いて見ると七弧とする方が穩當であらう。(圖版第三〇3)こゝに此の鏡を仿製品とするの一據所を見るわけである。

此の三者は同じ須玖岡本の出土品ではあるが、上に記した一群に比すると、うちに圖樣上一

致を缺く點があるのみならず、其の製作に於いて甚だ異なるものゝあるのも容易に認められる。此の後者は二三の遺品の上に特に著しく表はれてゐて、製作の拙粗から其の類を以て上代本邦人の手になつた仿製品とするの解釋が加へられ、それを更に第一の鏡にも及ぼさうとする論著をも見受けるのである。⁽⁴⁴⁾ 方格規矩鏡を仿製とする見解はなほ據り難いが、この事たる出土の遺跡が共に甕棺を主體とするもので、而も同じく細形銅劍を伴ふ點から、年代觀並に遺跡の性質に關聯することになつて次の考察にまた興味を與へるの觀點となるのである。

【註】⁽¹⁾ 此の鏡は中山博士「銅鉾銅劍發見地の遺物追加」(考古學雜誌第八卷第十號第十一號)の(上)に其の紹介があり、また

故宮岡氏の遺著『古鏡の研究』所收の「九州北部出土の古鏡に就いて」(未定稿)にも解説を載せ、この方には其の性質をも論じてある。

⁽²⁾ これは岡本聚落の北に於ける畑地から出土したものと云ひ、中山博士が其の「魏志倭人傳の生口」(考古學雜誌第八卷第九號)のうちに記載してある。

⁽³⁾ 尤も此の拓影に基く復原に當り、拓影の原物に比して若干の擴大を來すことに就いては、中山博士も夙に注意せられて、補正に意を用ひ新しい工夫を施した上、拓本に依る便益を利用せられたことが其の「須玖岡本出土の鏡片研究」(以下便宜上これを特に中山博士の論文と云ふ)のうちに見えてゐる。

⁽⁴⁾ 此の夔鳳鏡二條公爵の手から一度故徳川頼倫侯の所有に歸したが、同侯爵家の寄贈によつていま東京帝室博物館の所藏品となつた。修補後の寫眞をこゝに收め得たのは同館鑑査官後藤守一氏の厚意に依る。

⁽⁵⁾ 建築學會編『文様集成』第十三集所載。支那山東省濟寧州出土とある。徑六寸五分。いま東京帝室博物館の所藏に係る。

⁽⁶⁾ 即ち中山博士論文の第十七圖載する⁽⁸⁾の破片が第十九圖の⁽¹⁾に、また第二十圖の⁽¹⁾⁽²⁾⁽⁴⁾の一群に第十七圖の⁽⁶⁾の破片が接合して、こゝに圖版に見る如く、兩者の關係が明になつたのである。

⁽⁷⁾ 本鏡にあつては、實物の上で鈕區と外縁との中間、即ち乳を中央にして葉文を配した内區の幅を確むべき破片を見出し得なかつたが、幸にも焼失した東京帝國大學文學部の藏品のうちの⁽¹⁾に徵證たり得るものがあつて、其の拓本が存し、これの利用から上記の復原圖を作り上げた。その破片と云ふのは高橋博士の『銅鉾銅劍の研究』圖版第六の八に示すもので、前者との間に見ゆる幅の相違から本例に屬することは明瞭なのである。

⁽⁸⁾ 中山博士「銅鉾銅劍並に石劍發見地の遺物」(前出)第十一圖がそれである。

⁽⁹⁾ 中山博士の論文第十一、方格葉文鏡一面の項參照。

⁽¹⁰⁾ 十二字、十六字の銘を持つ方格四乳葉文鏡の例は羅氏の『古

鏡圖錄』にある。卷下第十七枚表の「日有濤。宜酒食。長貴富。樂毋事」は前者の一例であり、同裏の「大上貴富。長樂未央。延年益壽。幸毋見忘」は後者の例である。共にうちに破片に遺存する字割に相當るものを含むから、失はれた本鏡の銘の全文はその何れかであつたらう。

- (11)『桃華堂古鏡圖錄』圖版第五、羅氏『古鏡圖錄』卷下第十一枚裏の一鏡等参照。

(12)此の鏡は富岡氏の論文(上引)に所録以後多くの論著に引用せられてゐる。原品はいま桑名氏の手から離れて京都守屋孝藏氏の有に歸した。序に記するが守屋氏は別に此の種の銘辭を持つ遺品をなほ三面ばかり所藏してゐるし、羅氏の『古鏡圖錄』にも一面を載せてゐる(中巻第四枚裏)。内外兩帶の銘文の配布同一でないが、中山博士指摘の如くこの方が書體は破片に見ゆる處に近い。

(13)中山博士の論文の第一圖には此の鏡の鈕座の一片なるものを示して、復原が試みられてゐるが、其の破片の示す色澤なり、實は他の部分と違つてゐる上に、裏圈の外邊に僅かに遺存する線劃の工合が、これを本鏡に屬するものとなすに困難な點がある。で復原にはそれを除外した。なほ圖示の復原の際の縁の想定は明光なる二字を存する破片の示す色澤と厚さとの類似に依つたのであることを明記して置く。

(14)孫星衍『續古文苑』十四參照。錢坫の『鏡名集錄』にも此の鏡を載せてゐる。この銘文に就いては疑ふべき點を含むが、いましばらくそのまゝに従つて置く。

(15)中山博士の論文第五圖並に三、重閣清白鏡三面以上の項參照。

(16)尤も全く同一でないことは第二の鏡の破片の示す銘辭のうち、第四句につゞく一字が愼でなくて美と認められること

須玖岡本發見の古鏡に就いて

から知られる。然し同じ句の第三字目に美の字があるから、これは鏡銘に多く見る脫漏と解すべきものであらう。

(17)高橋博士「銅銚銅劍の研究」二三頁以下の須玖岡本遺跡の條參照。博士は和田、古谷兩氏の蒐集に係る破片から同鏡二面の存在を想定してゐる。

(18)中山博士の論文第二項「内行花文清白鏡」の條參照。

(19)此の種の内行花文清白鏡の銘文は未だ充分の解讀を得ない様である。故富岡謙藏氏は其の「九州北部に於ける銅劍銅銚及び彌生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」(前出)なる論文中、筑前三雲の出土品で、いま博多の聖徳寺に藏する同式の一鏡の解説に當り『博古圖錄』卷廿八に載せた文に二三の補訂を加へた銘を擧げてゐられるし、『泉屋清賞』鏡鑑部解説第一に原田淑人氏また其の銘を錄してゐるが、共に全文がなほ明でない。こゝに錄する處のものは、上の重閣清白鏡の銘文との對比から私の假りに試みた釋讀なのである。

(20)例へば博士が其の論文に於いて「内行花文式か重閣式か未詳の清白鏡」のうちに入れて記載してゐる第六圖の(1)(2)(3)(4)の如きがそれである。是等の破片の本來の鏡の上に占めてゐた部位は圖版二二、二三の復原圖參照のこと。なほ此の清白鏡の一部をなす内行花文の部分が許斐氏藏する復原星雲鏡のうちにはめ込まれてゐるらしい事が中山博士の記述「大槩を發見せる古代遺跡」から察せられる。

(21)高橋博士「銅銚銅劍の研究」圖版第六のうちの(六)に拓本を載するもの。

(22)中山博士の論文、(五)内行花文清白鏡系統の項第二(六六一二頁)參照。

(23)此の鏡もと平壤府の多田春臣氏の所藏であつたが、いま轉

じて、京都守屋孝藏氏の有に歸した。其の寫眞は關野博士の『樂浪郡時代の遺蹟』の第七十八圖に收めてある。

- (24) 其の破片の一端に見らるゝ鈕座に添へたらしい圖形からすると中山博士論文第十圖の(10)が同じく此の破片と推定してよい様である。

- (25) 中山博士論文第八圖の(4)(5)がそれである。

- (26) 同博士は其の論文で、破片に見ゆる斜に置いた格子目文を文字と解して遺存の銘を「毋見」となし、従つてそれを重圈清白鏡系統の遺品のうちに加へてゐるが其の誤りであることは、これを例へば朝鮮慶尙北道永川郡琴湖面出土の日光鏡(第三五圖の3)と對比することに依つて明にせられやう。

- (27) 中山博士論文の第八圖の(7)の縁片は其の色澤なり厚さなどからして此の鏡の一部をなすものと推定せられる。

- (28) 羅振玉氏『古鏡圖錄』卷下、第十一枚目表の下段所載の鏡、目錄に見日之光長不相忘鏡灘縣陳氏藏とある。

- (29) 中山博士「大甕を發見せる古代遺蹟」(考古學雜誌第十一卷第一號所載)に其の圖を載せ、これは一種の寄せ集めであるらしいが、而も須玖出土品として注意すべきものなのを指摘してゐる。

- (30) 同博士「爾後採集せる須玖岡本の甕棺遺物」(一) (同誌第十八卷第六號)、第三鏡鑑殘片のうちの星雲鏡復原の項並に第九圖參照。

- (31) 同博士の論文、十六の星雲鏡の項參照。博士は項の初に「須玖岡本の甕棺遺物中に星雲鏡が少くとも四面、場合に依れば五面あつたと思はねばならぬ」としてゐられるが、其の詳細を究めた説明を讀むと後述の如く疑問を含むとは云ひながら、うちに許斐氏の藏鏡、並に『考古精説』の大きな破

片が考慮に入つてゐないから、こゝに四面と云ひ五面とあるのは破片の復原から來たもののみと解すべきである。然らば博士の歸結また私のそれと背馳せないわけである。

- (32) 一例を挙げると博士は其の論文の上記の項で、附圖第廿三圖示す(2)(3)(4)の三者が互に接合する破片だとして、こゝに復原の一根據を求めてゐられるが、(2)と(3)との接合は明ながら、それ等と(4)とはこれを同一鏡の破片とすると、中間に若干の缺失部を考へなければならぬこと實物がそれを如實に物語つてゐる如きものがある。

- (33) なほ序にこゝに舉げて置きたいことは私の右の破片復原の中心の、内區に於ける紋飾乳と星雲文とにあつたこと従つてそれに伴ふ考慮是れである。既に中山博士も其の論文で指摘してゐられる如く外縁の内行花文帶並に鈕區と内區との關係はそれを確定する證佐に乏しく、また拓本だけより利用し得ないものでは比較上困難を感じたが、種々の考慮を加へた上、上記の如き歸結を得、然る後更に出来るだけ各部の破片をそれに附加した。従つて右の點では既記の銘文から確定したとはやゝ趣を異にしたものなのである。

- (34) 此の遺品まだ實見の機會を得ないがそれは註(29)の中山博士の論文に載する解説及び第二圖から導いた推測である。

- (35) これを別個の觀點からするも、其の特殊な九曜文形鈕を八木氏は三個を舉げてゐることであり、中山博士の萬集品中にも一個を見るから、少くも四面分あつた事だけは明に記し得る。

- (36) 所謂星雲文と虬龍文との連絡は吾々が蟠螭鏡と呼ぶ鏡の内區の主圖様である虬龍の局部の突起化した處からし、また方格虬龍文鏡の異形化した同じ傾向の顯著な虬龍の形の、星雲文への相似から推定出來やう。

(37) 此の形式の星雲鏡に就いては、中山博士の論文に小破片から苦心し作り上げた復原図がある(第二十六圖)

(38) 中山博士が「爾後採集せる須玖岡本の甕棺遺物」(前出)のうちに試みられた復原(第五圖)参照。

(39) 以上の外重圈文の中間突帯の破片に別個の鏡の存在を推測せしめるものがある。即ち圖版第二九の下段鈕に添へて寫した一片は、突帯のうちに、内帯の銘を分つ渦文の一部が見えて、それから圖版第二五のIの重圈日光鑑と似た形式が考へらる事はれである。かの中山博士の重圈精白鏡の鈕座なりとして復原した同部の片(註13参照)の鈕區を繞る突帯の外側に僅かに存する畫の一片が若し渦文とすれば、假りに置いた内行花紋清白鏡のそれではなくて或は此の片と合致するものかも知れぬ。試みに附記する。

(40) 博士の論文の第三回(考古學雜誌第十九卷第二號)の一覽表から此の數字が導き出される。本文との對比上其の部分の表を載せて置かう。

一、重圈精白鏡
二、内行花紋清白鏡
二面
三面以上

三、重圈清白鏡

四、形式未詳の清白鏡

四、内行花文清白鏡系統

六、重圈清白鏡系統

七、形式未詳の清白鏡系統

三面以上
二面以上
四面
五面
一面

(41) 中山博士の論文の第十五項並に第二二圖の復原形参照。

(42) 此の鏡片を最初に録したのは博士の「須玖岡本の鏡鑑増補」(前出)であるが(第三圖のか)「爾後採集せる須玖岡本の甕棺遺物」(前出)のうちに、破片を擴大して、それを蟬螭鏡片として、其の存在の事實の興味多いのを説かれた。

(43) なほ此のI地點發見鏡片中、いま京都帝國大學に保管する破片は近重理學博士に依つて其の化學成分が檢せられ、精良な白銅質から成ることの確められたのを記すべきであらう。但しそれに就いては同博士の「東洋古銅器の化學的研究」(史林第三卷第二號)並に故富岡氏の論文に詳しく、以後新事實を加へないから本文に再記を差控へた。

(44) 故富岡謙藏氏「古鏡の研究」所載「九州北部出土の古鏡に就いて」参照。

二 綜括と考説

須玖岡本の二地點から發見した古鏡鑑に於いて、其の一である三面から成る大正六年頃の出土品は破損しながらも、それ自體で形式の特質を見得る單純な類であるが、他のI地點から出た一群は破碎に加ふるに散佚を以てして、爲に其の復原に非常な苦心を要し、而もなほうち

須玖岡本發見の古鏡に就いて

に性質の究め難い類を含むものなること前項に詳述した如くである。さりとて右の記載から、其の形式のほゞ確められたものに就いて観るに、支那學者の所謂清白鏡なる遺品の過半數を占むることが容易に認められるのであつて、それに次いで多いのは星雲鏡であり、二種の所謂四乳葉文鏡は數の上では前者に及ばないが、孰れも大形の精品である點から從來知られた支那の同式鏡中稀に觀るものとして又注意を惹くのである。以上三者に對すると夔鳳鏡は一面に過ぎず、なほ形式の明確でない類も孰れも單一な例と思はれるから、彼等を以て本遺跡出土鏡を特色づけるものと云ひ得よう。

さて右の著しい三種の鏡鑑形式のうち、最も數の多い所謂清白鏡は讃岐國香川郡御殿山、大和國西ノ京等に於ける我が上代の古墳出土品中に、其の一形式である内行花文清白鏡の存在を認めるし、別に一例を持つ夔鳳鏡も亦攝津國武庫郡岡本村マンバイ伯耆國東伯郡社村筑前國嘉穂郡漆生等⁽¹⁾の古墳から類品が発見せられてゐる事ではあるが、然し如上の類は現在數百面に達してゐる我が上代の墳壟の出土品には寧ろ稀有な形式であつて、それを本邦領土内に於いて觀ると、近年多數の資料を出した朝鮮平壤附近に於ける漢代遺跡に相當な類例が見られると共に、本遺跡⁽²⁾と同じ性質の北九州の銅鉾銅劍を伴ふ甕棺關係の遺跡からの發見品に最も密接な關係のあることが注意せられる。尤も此の九州北部の特色を持つ甕棺遺跡から出たと云ふ鏡鑑類で從來知られてゐるのは、上に舉げた須玖岡本の二例を除くと、筑前三雲村の著しいものあるに過ぎないが、これは青柳種信の記述から、總計三十五面と云ふ夥しい鏡を發見して、それが重圈素文鏡、四乳雷文鏡、重圈精白鏡、内行花文清白鏡の四形式から成つて最後の

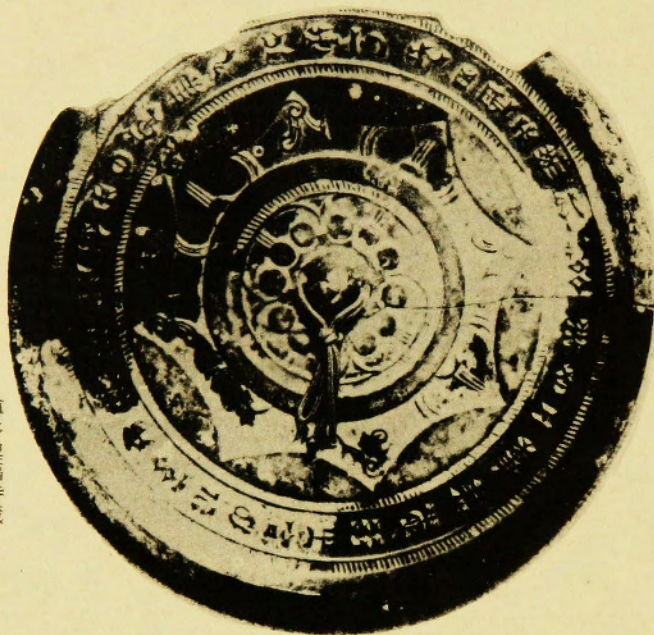
内行花文清白鏡が凡廿六面存した事が知られるから、餘の形式に出入はあるが、清白鏡が出土鏡の主要な形式をなす點で全く一致すると云つてよい。なほ發見狀態は不明ながら銅鉾銅劍と特殊の關係ありとして後藤守一君の報告した對馬國峯村八阪神社舊藏の一鏡また内行花文清白鏡の系統に屬したものを⁽³⁾而して近く中山博士に依つて紹介せられた筑前國二日市峯で安政四年に細形銅劍と共に甕棺から出た一面並に⁽⁴⁾昭和二年に同じ筑前國朝倉郡峯で甕棺の内から見出した一面の新資料に於いて前者が星雲鏡であり、後者は内行花文で「内清而以昭明」の銘を持つ須玖出土鏡に類例を見る式に屬し、而も各字間に而の字を加へたものと想定せらるゝから、數の上ではなほ乏しいが、該遺跡との間に同一特色のある事が自ら肯定せられる。これに對すると他の群の三者は同じ甕棺内の出土として、うちに前者に類品を存する内行花紋日光鏡を含むが、それは製作の上からはやゝ趣を異にする式であつて、最も特色を示す方格規矩鏡に至つては、上記の甕棺出土鏡に類例がなく、別に同じ甕棺かと思はれるが、鐵器の類と共存して筑前國の井原村から數多く出た記事が同じく青柳種信の『三雲村所掘出古器圖考』に見えてゐる。此の類はまた清白鏡の類に比べて、内地の古墳から完好な例が稍多く發見せられ、朝鮮の漢の樂浪時代の遺跡出土鏡では、長宜子孫内行花文鏡と並んで最も豊富な發見例を見る形式なのである。でこれを前者と對比することに依つてそこに我が領土内の上代の著しい遺跡と副葬の鏡の形式との間に存する相互關係の差異の併行的な事實が認められ、又右の須玖岡本出土の二群の遺物の年代上に於ける相違なるものが、自らなる姿に於いて意識に上つて來るのである。

いま此の如く綜括し特徴づけられた本遺跡出土品を中心とする甕棺内發見の鏡にあつて、其の性質の考查上重要なものは其の製作の年代であること極めて明瞭である。一體是等の鏡鑑の殆んど全部が支那製であることは前項の記載から何人にも首肯せられるところであつて、同じ式の鏡に對する年代觀の夙に彼地金石學者の著錄に載することも今更繰返すまでもない。其等の著錄に依ると、うちに例へば重圈四乳葉文鏡の如く一部人士の間に唐代の作品と解した類を含むが、⁽⁶⁾通じて見ると孰れも漢鏡とした式に屬して、年代觀に一致を示してゐる。たゞ支那金石學者の漢鏡なるものは、唐鏡に對立せしめた名稱であつて、單に前後の兩漢のみならず三國六朝を通じた前後七八百年に互る期間の製作品を抱括してゐるので、それは吾々にとつてはあまりに漠然としたものと云ふの外はない。されば本邦學者の新しい考察が如上のうち第一群に最も類例の多く且つ特徴の明な所謂清白鏡に向けられたのは當然の事と云ふべきである。これに對する最初の見解⁽⁷⁾では、銘の書體が吳の天發神識碑其他同代の碑文に似た處から魏晉の間に鑄造の年代を置くべきであるとなし、それを他の形式にも及ぼすと云ふ風に見えたが、初にも記した如く大正六年から七年に互つて、故富岡謙藏氏が先づ銘辭の上から王莽時代の鏡鑑を研究して、如上の一群中の所謂方格規矩鏡の同代に盛行した事實を證明すると共に引續いて本題の對象となつた鏡の綜括的考察を遂げて、其の主要な類の前漢時代に屬すべきを主張するに至つて、俄かに明確の度を加へることになつた。富岡氏の論著は支那の古鏡鑑なるものが、既に文献の豊富な歴史時代の所産なるに鑑み、從來行はれてゐた單なる型式學上の考察から一步を進めて、銘文の示す事實を重んじ、また同時代に並び存

第三七圖

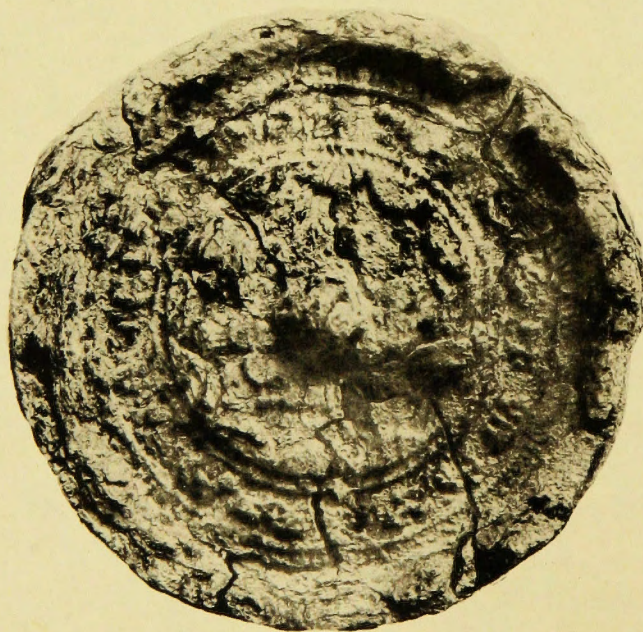
筑前甕棺遺跡發見鏡鑑

博多聖福寺藏



(1) 筑前三雲遺跡發見內行花文清白鏡

東京帝室博物館藏



(2) 筑前峯遺跡發見內行花文清白式鏡

した適確な遺物との比較研究に其の基礎を置いた上に考察は其の化學成分にも及び更に後には考古學上の資料として最も價值のある所謂フンドの示す事實に論據を求めて見解の修築を期するなど科學的な立論の方法を採つたので導き出された歸結が自ら高く價值づけられた。此の説出で、後中山博士の王莽規矩四神鏡を中心とした漢鏡系統論たる「古式支那鏡鑑沿革」の長編が『考古學雜誌』⁽⁹⁾に連載せられ詳密な筆で如上の諸類を王莽以前に置き相互の間に明確な系統を立てた博士独自の解釋が誌された事であり、又高橋博士の「銅鉞銅劍考」⁽¹⁰⁾が新しい姿で世に出て富岡氏の見解に據つて須玖岡本出土鏡が簡潔な記述で綜括を見、前者と好對照をなしたのは顯著な事實である。是等の論文に依つて富岡氏の見解は學界の定説となり、同じ類の鏡の古式なのを疑ふ人士を見ないことゝなつた。翻つて前項の記述から今日明確の度を加へた遺品に就くにそれは富岡氏高橋博士の擧げたものに三倍に近い數字を示してゐて中に重圈四乳葉文鏡の如く其の稀に觀る大きな形の復原出來たもの等を含み著しく注意を惹くのであるが、其の形式に至つてはなほ復原の全くない小片に違つた類の存在を推測するの外、主要なものは遂に故富岡氏の年代考證のあつた形式の範圍を出でない。然らばそれ等に就いてこゝに同じ様な論述を繰返すの要はないであらう。但し富岡氏の右の劃期的な論文が出てから既に十二年を経過したことであつて、此の期間こそは我が考古學界に於いて新資料の發見が相次ぎ、從來の面目を一新した時代なのであるから、其等の跡を辿ると、如上の年代觀にも修築を要すべきものが絶無ではなく、別に究明せられた朝鮮の考古學上の事實や、また支那古式鏡鑑の沿革の上から本題の諸形式を顧みる事に依つて、それ等の性質の一層明

確にせられるものがあるのを覺ゆる。従つて此の機會に其等の一班を録することにしたい。先づ前者に就いて觀るに、考古學上の論證に於いて最も確實性を持つところの一のフンドの示す内容から年代考定を確める資料は、支那内地の考古學上の調査のなほ興らないが爲に未だ多くの傍證を加ふるに至つてゐないが、而も故人の注意から佚した鳥居博士の調査に係る南滿洲遼陽西門外の箱式塋棺の示す一事實は、小形清白鏡の大泉五十、小泉直一等の王莽代の貨泉との伴出を物語つてゐて、清白鏡の行はれた年代の一端がそれから察せられるのを舉ぐ可きであるし、白耳義のブツカン博士が河南省榮澤縣の大形塋築の古墳から採集した一群のフンドの中には七に想定したと全く同じ重圈日光鏡が、前漢宣帝神爵二年鑄造の横上穿文五銖と並存の事實を示して、如上の年代觀に有力な一證を加へるものがある。⁽¹²⁾而してそれが仿製である點から製作の時期に就いて支那鏡に比し一層考察上の困難を感ずるに、地點發見の内行花紋小鏡に對しても、前年朝鮮總督府博物館に齎された鬱陵島出土の一群の遺物の示すところ頗る相似た乳紋を伴ふ内行花文の小鏡が五銖、大泉五十、貨布、貨泉等と共存して、其の年代推定上に一の有力なる據所を與へるものがあつて、これは須玖出土品が我が國に於ける最初の仿製鏡なる點に於いて別個の見地からも興味を惹くのである。是等の事實とは別に大正十二年秋に朝鮮平壤府の對岸なる漢の樂浪郡時代の遺跡から前漢末の居攝元年鏡の出土があつて、其の示す形式が所謂内行花文清白鏡の系統に屬し乍ら銘辭の體其他の表現に於いて丸味を帶び、軟かな感じを與へる式なのを知り得たことは、奇古な特徴の著しい普通の清白鏡の猶それよりも先立つものなのを察せしめる有力な一資料なのを記すべきであらう。⁽¹⁴⁾

右は故富岡氏の論述が後出の資料に依つて確められた二三の例であるが、こゝに其の立論に對して若干の修正を要とするものに夔鳳鏡の年代觀がある。故人の同鏡に關する見解は既に大正六年發表の「支那古鏡圖說」のうちに見えてゐる。⁽¹⁵⁾其の説く處夔鳳なる圖様は古銅器文から系統を引くもの、これが平面的な表現法は後漢に數面の紀年銘を持つ遺品を見る獸首鏡と一致するから漢代に行はれたことは認められるが、而も同鏡中には型式學上夔鳳形に種々の段階を示す遺品があるから、其の永續性が想定せられる。而して同氏所藏の夔鳳鏡に宋樊氏作の銘ある一鏡があるのは六朝代の遺品として、それに確證を與へるものとしたのである。此の形式のうちには私の嚮に紹介した一部に佛像を容れた例の如く頗る便化した遺品がある。右の見解は多くの人士の從ふ處となつて居り、從つて須玖岡本D地點から出た一面の如き、よし漢代とするも他とは時代の降るものと見做された事であつた。處が右の確實な六朝中期の遺品とした一鏡の銘は、同じく樂浪發見の漢永平十二年の漆圖案の銘其他に見ゆる例から推して宋樊氏作ではなくて「樊氏作牢」と讀むべきものなのを原田淑人氏が『古鏡圖錄』所載の拓影から説かれて、其の論據に疑念を生ずることになつた。⁽¹⁷⁾いまこれを實物に就いて改めて精査するに問題の字は宋でなくて牢⁽¹⁸⁾たるの畫を示してゐる事が認められた。でよし牢の意味に就いては問題ありとするも、其の鏡を六朝代と見た事の誤りであることが知られると共に、同じ銘文が單に後漢初の如上の一例のみならず、樂浪の漆器になほ所見があるから、かへつてそれを漢代とする一證となり得るのである。此の鏡は第三十九圖の2に示す如く、其の夔鳳文は極めて細緻な式に屬してゐる。これが漢代の製作となると、本例の如きもの

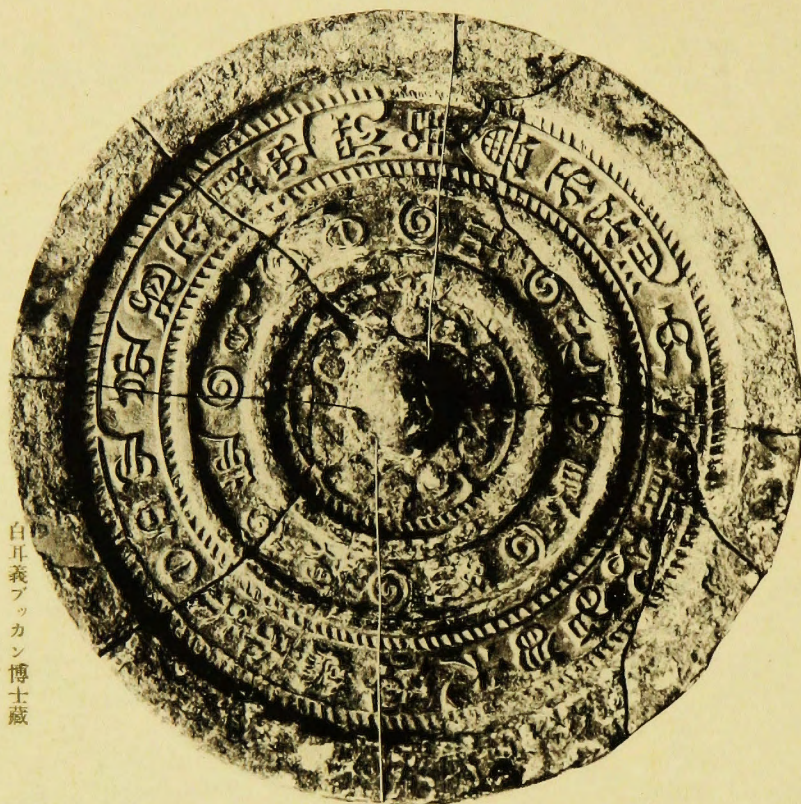
年代を強て後漢に下すの要がなくなつて、こゝに期せずして須玖岡本¹⁾地點出土の諸形式の示す實年代の一致を見ることになる。

さて考察を近時著しい進域を示した東亞の考古學上の事實に基く方面に轉するに、支那古鏡鑑の研究は、劃期的な業績を其の上に印した富岡氏の没後、數年を経て、文献上から年代の局限出來る北朝鮮平壤附近の漢樂浪郡時代の遺跡から學術的發掘乃至盜掘に依つて夥しい鏡鑑の出土があつて、それ等の示す處うちに種々の形式を含んで其の變遷を辿り得るものがあると共に、上記の居攝元年鏡以外にも伴出の遺物から實年代を推し得る類に乏しくなく、兩者の考察は前漢の後半期即ち漢の四郡の設置以來、其の廢滅に至る魏晉代まで約四百年間の支那に於ける鏡鑑形式の變遷の大體を跡附け得るに資することになり、そこに一の進境を示すに至つたのを舉ぐ可く、また數年來歐米に於ける所謂秦式銅器の愛好に伴ふ蒐集熱の流行は、似た文様を持つ鏡鑑の市場への出現を促して、銘辭のない處から從來支那學者から殆んど顧みられなかつた類が續々將來を見ることがなつた。⁽¹⁹⁾是等の文様の比較研究は支那鏡の前漢以前の存在を實物の上にも認め得る端緒となつて、暗黒裡にあつた支那に於ける金屬鏡出現の初期の狀態が、やうやく開明の曙光を見出し得るに至つた。即ち二者を通じて今や所謂鏡鑑學の面目はまた新たなならんとしてある。須玖岡本出土鏡は上に論じた富岡氏の考定した年代に従ふと、恰も兩者の中間に位することになるのであるから、其れ等相互の關係を辿ることこそ年代觀の當否の背景を物語るものとして、兼てまた學的に興味の高い廣い支那古鏡鑑沿革上に持つ其の位置が確められることにもなるのである。

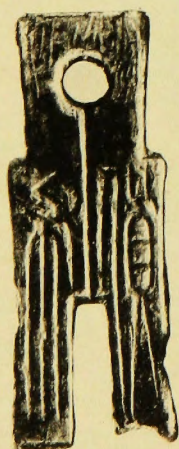
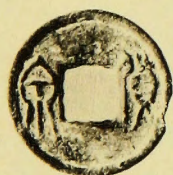
第三八圖

支那及朝鮮發見鏡鑑等

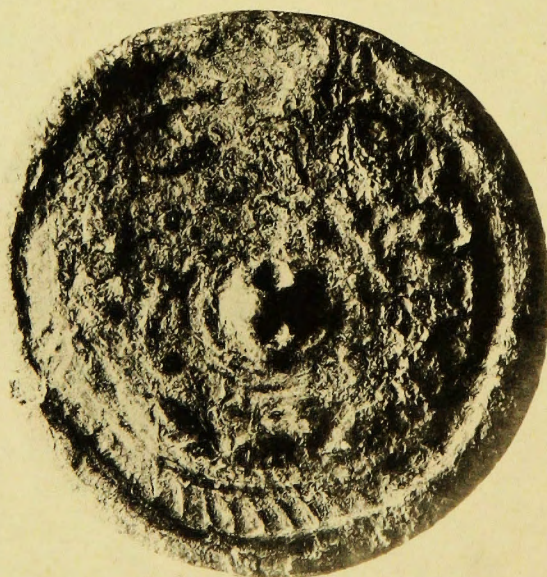
白耳義ブツカン博士藏



(1) 支那河南省榮澤縣發見重圈日光鏡



藤田亮策君寄贈寫真

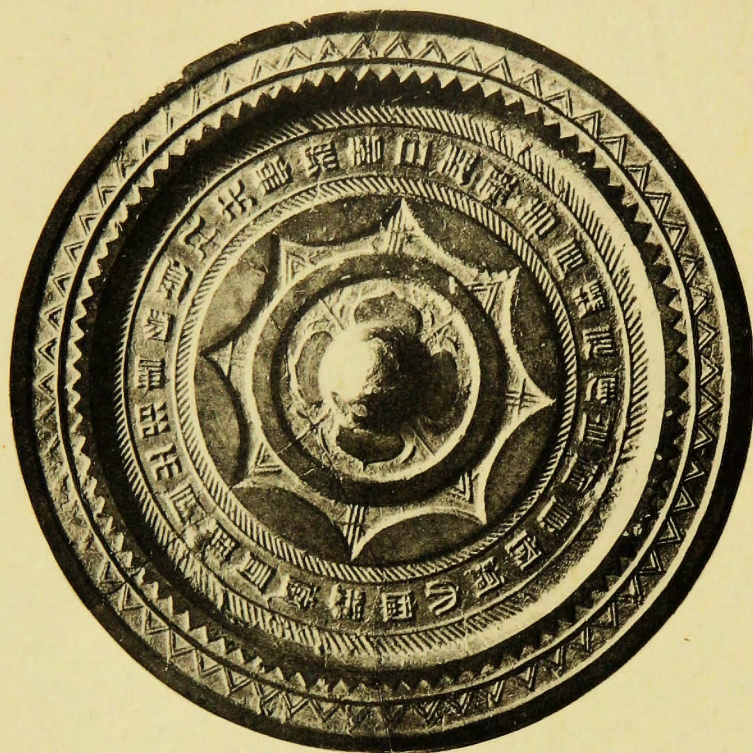


(2) 朝鮮鬱陵島發見內行文鏡及錢貨

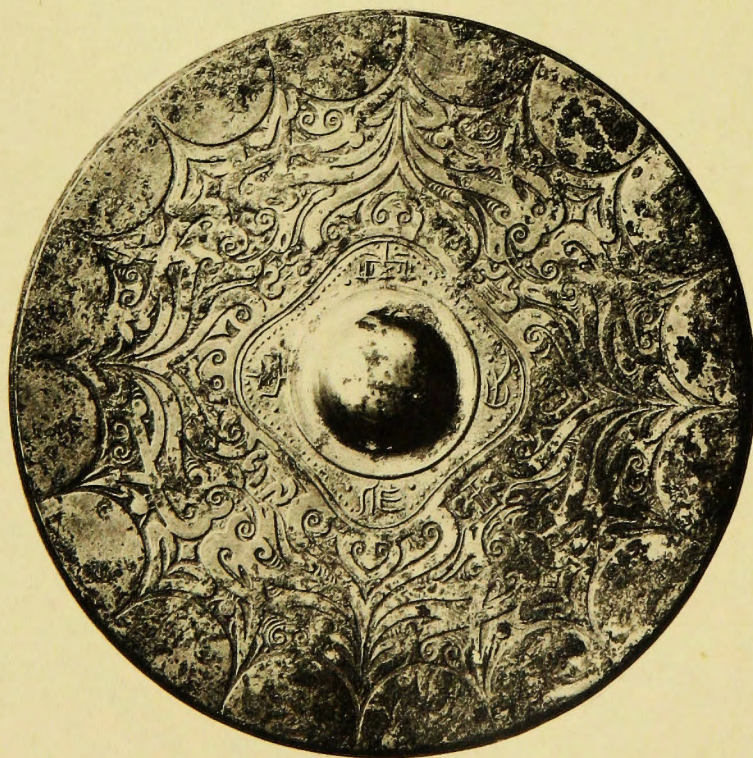
第三九圖

朝鮮樂浪發見等鏡鑑

守屋孝藏氏藏



(1) 朝鮮大同江面發見居攝元年內行花文鏡



(2) 樂氏作夔鳳鏡

宮岡益太郎氏藏

支那の金屬鏡の起源の何れにありやはなほ多くの疑問を包んで今日容易に明になし能はないのであるが、新たに吾々の前に提供せられた遺品の示す處に依ると其の文様の配布に於いて、うちに先秦銅器の特質を傳へて、それを平面形に移した均勢的な構圖から成るものあると共に、他方圓形のうちに同じ特色を持つ雷文變形動物文を簡單に埋めた原始的な式を存し、同じ類に別個の圖様を均勢的に重ねて配布したものや、ついで其の地文が著しく細密リファインされ、別に配置の圖様の顯著を加へた類から、地文の漸次影を失ひ行く段階を形式の上に如實に示す例があつて、其等から一の文様の系統觀を考へ得るのである。而して其の地文の上に表はれて來る圖様——主として虺龍文——はうちに三面的なものもあるが四面的な傾向が著しく、嚴正なる配列に特色を持つてゐる。是等は通常漢以前の銅器文の特色と考へられてゐる處に近い上に、カールベック氏に従ふと文獻の上から遺跡の年代を戰國の末期に推し得る淮水流域の古墳に多數存在してゐたと云ふからそれが事實とする⁽²¹⁾と西紀前四五世紀から二三世紀の間を含ませめた吾々の所謂秦代に屬したと見る事が價值づけられて來る。それに對すると朝鮮の樂浪遺跡出土の鏡鑑は、形式上整齋にして而も著しく複雑な構圖を示す方格規矩四神鏡の類と、内行花文長宜子孫鏡の類が最も多く、兩者が過半数を占めて、古式では内行花文清白鏡系の遺品夔鳳鏡の類を若干見受ける。前者にあつては圖様の變化の上に種々の段階を示す實例を存するが、伴出品から年代を西紀前後の一、二世紀の間に置く可き徵證を持つ類は孰れも其の整美な式で、均勢的な構圖のうちに多分の繪畫的意味を盛つたこと、例へばそれ自體に製作年代を示す王莽四神鏡⁽²²⁾に於けると相合致したもののが認められる。

いまこれを以て須玖岡本出土鏡に比するると、⁽²¹⁾地點出土に係る主要な遺品は、其の一部例へば清白鏡、夔鳳鏡等に於いて同じ形式を存してゐるが、樂浪の遺跡に最も顯著な二類の整美な式は一も見えなく、僅かにB地點から出た一面に方格規矩鏡の古き面影を求め得るに過ぎないで、清白鏡、星雲鏡の類が主要な形式をして、別に中山博士が其の系統論で詳記した方格規矩鏡の依つて生じたとする方格葉文鏡があり、主要な類が何れも内行花文帶の古形を構圖のうちに持つものなのが確められる。して見れば本遺跡出土鏡は一部分樂浪出土鏡に重複するが大體に於いて違つた類であつて、これ等が形式の上からし、又王莽以後魏晉に互る多數の紀年鏡の示す構圖乃至表現の特質から、該形式の盛行よりも先立つ時期即ち前漢代のものとするこの大局上の妥當性が考へられるのである。

次にはじめの所謂秦鏡の一群との關係如何に於いては、須玖岡本出土鏡では小破片のうちに見る一種の虺龍様文片の古拙なものを除いては、直接形式の上の相似乃至同一な類を見受けないが、而も前項の注に記した星雲鏡の圖様が虺龍文(或は蟠螭文)から發して其の變化したものであるとする形式系統觀が認容せられると、其の間に先後の關係が當然考へられることであるし、更に其の出土品の主要な類に於いて同じ特質を持つ筑前三雲の發見鏡には四乳雷文鏡なる前者の代表的の遺品存在し、また重圈素文鏡なる古調を帶びた一鏡のあることが注意せられる。即ち此の場合でも本遺跡がその一部をなす北九州の所謂甕棺内から出た鏡の示すところ、一部分に所謂秦鏡の形式を含むことが知られる。果して然らば同類を兩者の中間に置く年代觀は、このより廣い觀點からも、其の然るべき所以が充分認められるのである。

つて、此の上限の所謂秦鏡との接觸こそ、我が國への支那文化の傳播の時期を推測する一の據所をなすものとして、新に注意に上つて來やう。右の概觀から從來發見の遺跡に於ける各遺品の形式を更に顧みると、本題に詳記した須玖岡本D地點の遺跡出土品が其の中間位を占めたものと考へられるのに對し、三雲村の遺品は同じ特徴を持ち乍ら、やゝ古き形式を含み、須玖岡本のB地點の出土鏡がこれとは反對に、時代に於いて下るものであることがまた自ら考へられて來る。然らばこれに其の舶載品であると云ふ事實を考慮のうちに置くことに依つて、そこに北九州に於ける所謂甕棺なる特殊遺跡の實年代考定の重要な基準の一が形造られる次第であるし、また右の時代の最もおくれたと思惟する遺跡に於いて、古式内行花文鏡系の仿製品の共存を見出す事は、それより先立つ時期に於ける舶載品が、當代の民衆を刺激して、模作の現象を生じたと解することに依つて、單なる外來文物の傳來から、それを享受する働きの發生を考へしめて、津々たる興味を感ずるのである。

以上私は是等遺品の年代考定に則して論をすゝめたが、翻つて一般鏡鑑研究の立場から見ると、上記諸遺跡出土品は考古學研究上最も重要なフンドとして、而も多數の遺品を含むところから、かゝる資料に甚だ乏しい東亞の考古學界にあつて、所謂秦鏡と朝鮮樂浪古墳出土鏡の中間の型式を示す遺品としての價值を持つと云ふ前者との微妙な因果關係が認められるのである。こゝに又吾々が破片から上記の如き種々の形式を復原し、其の性質を論じた一の意味が存する事を特記して、此の小編を結ぶことにする。

【註】(1)是等の鏡に就いて記した手近な文献は後藤守一君の『漢式鏡』であつて、それには一々の出典を記してある。筑前國漆生の夔鳳鏡は同書出版後に知られたもの、これは柴田喜八氏の「筑前漆生の古墳群」(考古學雜誌第十七卷第二號)を見よ。

(2)朝鮮平壤附近に於ける漢代遺跡出土の鏡鑑に就いては梅原「北朝鮮發見の古鏡」(東洋學報第十四卷第三號)同「再び北朝鮮發見の古鏡に就いて」(同十五卷第二號)に綜括的記述を試みて其の性質をや、詳しく論じて置いた。關野博士の『樂浪郡時代の遺蹟』(總督府刊)、後藤守一君の前記『漢式鏡』にも同じ資料を載せてある。

(3)後藤守一氏「對島瞥見錄」(其二)(考古學雜誌第十三卷第三號)參照、廣鋒銅鉾と共に傳へられてゐたのを記してある。

(4)中山博士「銅劍及び前漢式鏡の資料増補」(歴史と地理第二十四卷第六號)參照。これと殆んど同一の記事が、同博士の「太宰府附近に於ける彌生式系統遺跡調査」(一)(考古學雜誌第二十卷第六號)に重出してある。

(5)中山博士「クリス形鐵劍及前漢式鏡の新資料」(同誌第十七卷第七號)參照。これには鏡銘は一字も讀み得ないところがある、幸にも第三七圖の2に載せた島田君撮影の寫眞から、其の銘文を本文の如く推定することが出來た。

(6)『西清古鑑』卷四十に徑五寸七分の此の種の鏡を載せて唐四乳鑑としてゐるのがそれである。

(7)此の最初の見解の一端は「考古學雜誌」第六卷第八號の考古學會記事のうちに見ゆる。東京帝室博物館の美術部では大正十年前後まで此の見解に據つて清白鏡を管代のものとしてゐた。なほ高橋博士「銅鉾銅劍の研究」を見よ。

(8)此の點は氏の遺著「古鏡の研究」收むるところの「九州北部

出土の古鏡に就いて」のうちに見ゆる。

(9)「考古學雜誌」第九卷に七號に亘つて連載せられた、稀に見る長編である。

(10)同上第十三卷第一號以下參照。鏡の研究は其の第四號に載つてある。博士の「銅鉾銅劍の研究」はそれに補訂を加へられたものである。

(11)鳥居博士「南滿洲調査報告」參照。

(12)ブッカン博士調査の古墳なり出土品の事は Bulletin de la Société d'Anthropologie de Bruxelles, Tome XXXVI (1921) 所載 S. Les Antiquités funéraires du Homan central et la Conception de l'ame dans la Chine primitive d'après des documents archéologiques et paléographiques に詳しいが、こゝに挙げたのは昭和三年初夏ブラッセルで親しく實物を觀察した結果に基づく。

(13)昭和四年九月藤田亮策氏よりの圖書並に所贈寫眞に基く。樂浪出土の居攝元年鏡に就いては廣瀬都巽氏の「紀年鏡二件」(考古學雜誌第十五卷第六號)梅原「再び北朝鮮發見の古鏡に就いて」(前出)、關野博士「樂浪郡時代の遺蹟」(前出)等を見よ。

(14)富岡氏「支那古鏡圖說」(三)(國華第廿七編第十一冊)の五、夔鳳鏡の條參照。

(15)佛教美術第十四冊所收、梅原「歐米で觀た佛像を表はした三面の古鏡」のうち、第一第二の兩鏡參照。

(16)原田淑人氏「再び樂浪出土漆器銘文中の泊字に就いて並に牢の字に就いて」(史學雜誌第三十八編第六號)參照。なほこの事に就いて小場恒吉氏から教示を受けた事を附記する。

(17)内藤博士は漢官儀の宗廟三年一大祫の章に見える毎年二分

之並に太牢之左の句から本文引く永平十二年の漆器銘文の牢を解せんと試みられたに對して、原出氏が『韓非子』に見ゆる「東夷之陶者器苦窳、舜往陶焉、非年而器牢」の牢と同義に解せんとして兩者の間になほ一致を缺いてゐる。(註前項の論文參照)

(19) The China Journal of Sciences & Arts 所載 Oscar Karlbek ; Notes on Some Early Chinese Bronze Mirrors 參照。

(20) 梅原「古式支那鏡の二新例」(考古學雜誌第二十卷第一號) 紹介したものが其の例である。

(21) 此の Karlbek 氏の所見は Documents d'Art Chinois de la collection Osrud Siren (Ars Asiatica VII 1925) の銅器の條に見ゆる。

(22) 王莽の四神鏡に就いては故富岡氏遺著『古鏡の研究』所收の「支那古鏡圖說」「王莽時代の鏡鑑と後漢の年號銘ある古鏡に就いて」に詳しい。

(23) 上引中山博士の「古式支那鏡鑑沿革」のうちの第一回、王莽鏡の鈕坐及方形格の起源並に其の沿革の項參照。この文中同じ事が漢の中期に行はれた細線式獸帶鏡と重圈葉文鏡との間にも認められると説いてあるが、本文簡潔を旨として一例を擧ぐるにとどめた。

(24) 故高橋博士「六朝以前紀年鏡資料の増加」(考古學雜誌第十八卷第六號) 參照。梅原はその表に補正を加へて、更に銘文と形式とを併せて「漢三國六朝紀年鏡集錄」を書いた。(支那學第六卷第一號)。其の現在知られた遺品は七十餘面ある。